



戦後
80年

非核平和
都市宣言
40周年

戦後80年及び
非核平和都市宣言40周年 記念事業
芦屋市

未来世代と市長との ディスカッション レポート

戦後80年及び
非核平和都市宣言40周年記念事業として
実施した「あしや平和の集い」にて、
「未来世代と市長とのディスカッション」と
題して、市内3校の生徒にご出演いただき、
これまでの平和への取組とこれからの取組に
について話し合いました。
本冊子は、そのディスカッションの内容を
再編集したものです。

芦屋市長 高島 嶽輔

出演者

芦屋市長 高島 嶽輔
兵庫県立芦屋高等学校
兵庫県立国際高等学校
兵庫県立芦屋国際中等教育学校



あしや平和の集い
開催日：令和7年8月23日(土)
会 場：ルネサンスクラシックス 芦屋ルナ・ホール

1. イントロダクション

高島市長

戦後80年というものは、とても大きな節目だと考えています。私は今28歳で、祖父母はいま90歳くらいです。戦時中は現在で言う小学生くらいの年齢でしたので、当時の記憶が結構残っているようです。ご登壇いただいているみなさんは私より10歳くらい年下なので、みなさんのお祖父様やお祖母様の中には、当時お生まれでなかった方もいらっしゃると思います。そう考えると、戦後80年という節目は、次の世代にどのように継承していくか、真剣に考えていかなければならない節目なのだと思います。今回は、芦屋市内にある3つの学校のみなさんに参加していただきて、未来のためにどんなことができるのかを話し合っていきたいと思います。ちなみに、広報あしや8月号をご覧になった方、どのくらいいらっしゃいますか。実は、本日ご登壇いただいている一部の方には、広報あしやの平和特集にもご出演いただきました。まだ見ていないという方は是非、ご覧いただきたいと思います。

2. 各校の取組の紹介

高島市長

はじめに、各校のみなさんから、それぞれ平和について考えたこと、感じていることについて、発表いただきたいと思います。最初は、芦屋高校のみなさんから発言いただきたいと思います。芦屋高校は、終戦前からあった学校ですよね。そのあたりも含めてお願ひいたします。

芦屋高校
(小松さん)

芦屋高校は1940年創立なので、戦争を経験しており、当時の資料も多く残っています。地歴の先生が授業でお話しされることもあります。1945年3月に行われた当時の卒業式では、当時は旧制中学だったため、本来は5年生のみが卒業するところを、働き手を増やすために、4年生と5年生が同時に卒業し、2年生と3年生の多くが勤労動員のために不在の中、3年生の総代、佐藤長光 さんが述べられた送辞の中には、「益々旺盛なる士気を以て、皇国の為、大東亜建設の為に、ご奮闘ください。」とありました。尊敬する先輩方のこれから門出に、国のために戦うことを期待するような言葉を述べることは、大変つらかったただろうと感じます。何のために学び、何のために卒業するのかを考え、思い悩んだ末に送られた言葉は、卒業生だけでなく、在校生、教員、保護者にも伝わり、平和や自由を第一に考える、芦屋高校の校風につながっているのだと感じています。

芦屋高校
(小林さん)

私は終戦のことについてお話しさせていただきます。芦屋高校では、戦後まもなく文部省から出された「新日本建設ノ教育方針」に従い、いち早く校内の民主化や、生徒の自主的な活動が進められました。若い力で学校や日本を盛り上げようというエネルギーにあふれていたようです。その中で野球部が創部し、翌年の甲子園大会に初出場を果たしました。また、1946年3月に行われた第1回の弁論大会では、「校歌を作ろう」という演説がありました。生徒や教員、卒業生から広く歌詞を募集し、集まった27の候補作品の中から生徒・職員が投票し、1位のものが校歌、2位のものが自治会歌となりました。特筆すべきは「春曙（あけぼの）の打出浜」から始まる、和歌をちりばめた美しい歌詞の中に、「平和の女神」、「生命の飛躍」、「夢路に通う新日本」といった、平和な社会を自分たちで創るといった強いメッセージが盛り込まれていることです。

	<p>戦争を経験したからこそ、新しい世の中を平和で自由な、民主的なものにしたい、それを芦屋高校の生徒で成し遂げたいという先輩方の思いを、忘れてはいけないと思いました。</p>
高島市長	<p>ありがとうございます。</p> <p>芦屋高校というと、「自治」というイメージがとても強い学校です。先ほどの送辞の言葉も大変つらかっただろうと思いましたが、こう聞くと、戦争の歴史があったことも、現在の自治の精神につながっているのだと感じました。</p> <p>続いて、国際高等学校の生徒さんからご発言いただきたいと思います。県内でも珍しい、国際的な教育を実践されている学校ですね。よろしくお願ひします。</p>
国際高校 (アモイさん)	<p>このディスカッションに出る前に、「平和」という言葉について調べてみました。辞書やインターネット、どの媒体でも「争いがない状態」を指していました。辞書の意味はもちろん正しいと思いますが、戦争や紛争がなければ平和なのかというと、私はそうは思いません。争いがなくても、戦争や紛争がなくても、ある条件を満たさなければ平和だとは思いません。</p> <p>本当の平和というのは「子どもが夢を見れる状態」だと私は考えます。私はフィリピンの国籍を持っていて、実際に自分の目で、日本と違う環境を見てきました。私たち高校生と同じ年か、年下の子どもが肉体労働をしているところをたくさん見てきました。経済的に家族が困っているから、自分も働かなければならないという子もたくさん見てきました。</p> <p>本来あれば教育を受けなければいけない世代が、なぜそのようなことをしているのか。教育を受けられなければ、社会は混沌と化していくと思います。同年代や年下の子たちが、夢を見れる状態を作っていくことが、平和を作っていくことなんじゃないかなと考えます。</p>
国際高校 (天野さん)	<p>国際的な平和活動について考えると、紛争や貧困、環境問題などのさまざまな問題が絡み合っていることに気づかされました。平和というのは単に戦争が一つもないという状態ではなく、人々が平等で安心して暮らせる社会こそが、本当の意味での平和だと私は思っています。</p> <p>国際的な平和活動には、難民支援・貧困削減・教育の普及・環境保護などの多くの側面がありますが、今、私たちができるることは、ひとりが世界の問題に関心を持ち、自分が今できることをしっかりと考えていくことだと思います。例えば、募金活動に参加したり、フェアトレード製品を選んだりすることも、国際平和につながる大きな一歩です。</p> <p>平和は誰かに任せるものではなく、一人ひとりが「自分なら何ができるのか」を考えることが、真の国際平和につながると私は信じています。</p>
高島市長	<p>ありがとうございます。</p> <p>お二人の話で共通しているのは、ただ戦争や紛争がない状態だけが平和ということではないということでした。確かに、環境や貧困、難民、さまざまな問題が平和につながっています。このお話は、のちほど深掘りしていきたいと思います。</p> <p>最後に、芦屋国際中等教育学校ですね。国際的なルーツのある生徒がたくさん通われている学校だと思います。よろしくお願ひします。</p>

国際中等 (石原さん)	<p>私たちの学校は、日本で最初の公立国際中等教育学校で、現在29か国の生徒が通っています。そんな私たちの学校では、活発に生徒会活動を行っています。例えば、地域の小学生と交流する「芦屋マダン」や、「小さな地球交流会」では、在籍している中学1年生から高校3年生までのメンバーが一緒に、班に分かれて国際問題や災害について話し合っています。最近の交流会では、「避難所で様々な国の人と生活する際に、周りの人に知っておいて欲しいこと」というテーマで話し合い、自分一人で考えてもなかなか思いつかない、多方面からの意見を知ることができました。</p> <p>その他にも、本校にはボランティア同好会があり、被災地支援活動や防災のための授業を行っています。</p> <p>このように、芦屋国際中等教育学校では平和のための活動に日々取り組んでいます。そしてもっともっと平和についての理解を深め、周りの人とも共有できるようにさまざまな取り組みを行っていきたいです。</p>
国際中等 (渡邊さん)	<p>私が学校に通っていて、感じていることをお話しします。</p> <p>ご飯を残さずたべる。器をもって食べる、家に入るときは靴を脱ぐ、公共の場で大きな声を出さないなど、私はこれらがマナーであり、常識とされる環境で育ってきました。しかし、国によっては器をもって食べませんし、場合にもよりますが、ご飯を敢えて少し残すこともあります。また、靴を脱ぐなどの日本の常識とされていることも、他国では常識ではありません。</p> <p>このような「違い」を知らず、また、お互いに相手の背景を知ろうとせず、自分の主觀で人を決めつけてしまうと、争いが起こってしまうのではないかと思う。</p> <p>みんなが笑顔で平和に過ごすためには、一人ひとりが違う文化、違う環境で育ってきたことを理解し、お互いに認め合い、思いやりをもって関わることが大切だと思います。</p>
高島市長	<p>ありがとうございます。</p> <p>29か国の生徒が通う環境にいると、自分が普段持っている当たり前が、当たり前じゃない人もいるかもしれないという気づきが、きっと日々あるんだろうなと思いました。</p> <p>ここまで各校のみなさまにお話しいただきましたが、印象的だったのが、平和が、戦争について考えることだけではないということです。戦時中にどういったことがあったのかを伝える、平和を守るためにどんなことができるかを考える、最近起きている戦争や紛争について知る、ということ以外の活動も、意外と平和につながっているのだというお話がいくつか出来きました。</p> <p>例えば、芦屋高校の「自治」もきっと平和につながっているのだと思います。みんなの学校の中で、直接的に平和のための活動とは言っていないけれど、実は平和につながっているんじゃないかなという活動ってありますか。</p>
芦屋高校 (小林さん)	私たちは自治会執行部という形で活動していますが、議論がある中で、対話をするということが平和につながっているんじゃないかなと思っています。
高島市長	具体的に、すごく意見が分かれた経験ってありますか。
芦屋高校 (小林さん)	昨年、芦屋市で高校生宣言を出させていただいたときに、どういう宣言を出すのかという意見の対立があって、小松さんと私とでも対立したこと也有ったので、そういうところは大きな壁だったと思います。

高島市長	高校生宣言は、この3校で一緒に芦屋市議会の議場を借りて宣言してくださったものでした。どなたか説明いただけますか。
芦屋高校 (小松さん)	芦屋高校が、国際高校と芦屋国際中等教育学校にお声掛けをさせていただきて、芦屋市内の県立3校で、より良い高校生になるには、それぞれ違った学校生活を送っている私たちが協力して、高校生にできることを、意見を出し合い、高校生としてどうあるべきかをテーマとして出した宣言です。
高島市長	<p>参加者も多く、議論も白熱しました。みなさんどんなことをお話ししたか覚えていますか。</p> <p>ある高校が案を投げかけたら、それはどういう意味ですか、と多くの質問が投げかけられる場面がたくさんありました。「自由」「多文化」「相互理解」など、抽象的な言葉についても丁寧に議論が交わされていたことが、とても印象的でした。その意味では、お話をいただいた高校生宣言をつくるプロセス、意見が対立する中でも、対話を通じてひとつの結論を見つけるプロセスも、平和につながっているのかもしれませんと感じました。</p> <p>他にはどうでしょうか。学校生活や普段の生活の中で、一見平和のためって感じではないけれど実は平和につながっていると感じることはありますか。</p>
国際高校 (アモイさん)	国際高校では、CCC（総合的な探究の時間）、簡単にいうと、探究をするという授業があるんですが、その探究では、1年生はグループで社会問題について考える、2年生は個人で社会問題について考えるという、何かの困りごとに対して、自分たちで解決策を生み出せないかという授業があるんですが、普段生きている中で、社会問題って特に私たちの世代はあまり考えないと思うんです。学校を通じて社会について考えることで、これは私の持論ですが、日本は比較的安全な国ですが、社会を見ていくと、先進国ではあるけれど、まだまだいけないところ、直さないといけない部分があると気づいていけることが、このCCCの魅力、自分たちを成長させてくれる、平和につなげてくれるひとつの授業だと考えています。
高島市長	アモイさんは2年生ということで、探究のテーマはなんですか。
国際高校 (アモイさん)	フィリピンに住んでいたこともあったので、お金について考えていて、例えば家庭が裕福でなかったとしても、一代で財を成すとよく言われますが、どうすればうまくお金をうまく作り出すことができるのか、どうすればお金を社会のためにうまく使っていけるのか、というテーマを課題として進めています。
高島市長	<p>それはとても深いテーマですね。</p> <p>社会のためにどうお金を使っていくのか、市役所でも普段から考えていることなので、また是非教えてください。他の学校はいかがですか。</p>
国際中等 (石原さん)	先ほども少しお話しさせていただいたのですが、私たちの学校で実施している「小さな地球交流会」で、中高の6学年が縦割り班になって、何かのテーマについて話し合うことを一学期間に1回行っています。テーマや当日の司会は生徒会が行っているのですが、国際問題について話し合うときは、どうやったら解決できるか、解決に至らなかったとしても、改善するためにできることへの問いかけがよくあるので、実際に私たちが実行して、直接国際問題に影響があるかはわからないですが、そういう意識を持つことが、少しは平和に近づける

	のかなと思います。
高島市長	国際問題の中で、私は以前伺った避難所の話が特に印象的なのですが、これは難しいなと感じたことはありますか。
国際中等 (石原さん)	私が担当した教室では、食事の提供時間についての話し合いがあって、イスラム教の方は断食の時期があり、日が昇っている間は飲食ができず、非常食を提供する時間が朝だと受け取っても食べられないで、提供時間について改善できるんじゃないかというお話をありました。また、国の文化によっては、人に足を見せるのがよくない国もあるので、避難所の中でも生活スタイルが分かれるので、どう解決していくのかが難しい問題だと感じました。
高島市長	いざ避難所に避難することになって、避難所で初めて文化の違いを知るよりも、普段からそういうお話をすることは大切ですね。とても印象的なお話をでした。ありがとうございます。

3. 各校への質疑応答

高島市長	さて、これまで私は質問してきたので、高校生のみなさんが、他の学校にぜひ聞いてみたいことはありますか。
芦屋高校 (小林さん)	芦屋高校は国際的なつながりがなくて、あまり他の国の文化などはわからないのですが、学校生活の上で、ここは違うからどうしていこう、と文化の違いを日常的に考えていくことがあるんでしょうか。
国際高校 (天野さん)	国際高校は帰国子女の方もいらっしゃるんですが、半数以上が日本国籍で、逆に外国籍を持っている方の方が少なくて、日々文化の違いを感じることはあまりないのですが、意見の食い違いや考え方方が違ってくることもあるので、まずはちゃんと、その人のことを受け入れて、お互いに嫌な思いをしないような会話を広げることなど、自分もですが、日々そういうことを心がけています。
芦屋国際 (渡邊さん)	私たちの学校では29の国や地域の人のがいるので、教室内でも日本語・英語・ネパール語・韓国語・中国語、いろんな言葉が飛び交っていて、それが当たり前に感じてきていて、違いがあることが当たり前になってきています。とはいって、いろんな環境で育ってきて価値観が違う人はたくさんいるので、自分が今まで過ごしてきて得た固定概念は、なくした方がいいのかなと思います。
高島市長	お二人は中学から入学したんですよね。入学当初に感じたカルチャーショックはありましたか。
芦屋国際 (石原さん)	私は海外で住んだ経験があるので、入学した時に大きくショックを受けることはなかったのですが、今まで自分が知らなかったこと、今まで住んでいた国とはまたまったく違う文化や習慣があったりするので、それはそこに行っていた人にしかわからないので、お話を聞いてみたいなと思って、休み時間に聞いたことがあります。
高島市長	まったく違う文化で暮らしてきた人と初めて接したとき、びっくりしたり、カルチャーショックを受けたりすることは、きっと誰しもあることだと思っています。初めて海外に行ったときもそうかもしれません。私も初めてアメリカで暮らしたとき、ここまで違うのかとびっくりしたことがたくさんありました。

	今日は多くの市民の方々が見に来てくださっています。芦屋市には海外から来られた方や、さまざまな文化背景のある方々も暮らしていますが、どういうところを大切にして、みんなで暮らしていくら良いと思いますか。
芦屋国際 (石原さん)	先ほど渡邊さんも言っていたのですが、自分が今まで思ってきたことが当たり前じゃない、という考え方方が大切だと思っていて、誰しも違いはあるので、人は一緒にないことが当たり前だとは思うんですが、最初から、相手は自分と同じ考え方じゃない、自分が正しいと思っていることが間違っていることもある、違う国の人たちと関わるときにそういう考え方を持つことができていたら、もし意見が違ったとしても対立することも少なくて、そちらの国ではそういう考え方なのか、と広い視野で考えることができると思います。
高島市長	どちらが正しくてどちらが間違っている、ということではないですね。同じ日本人同士、同じ芦屋に住んでいる人でも考え方方が違うこともあるので、一人ひとり考え方方が違うということからスタートするのが大切だと思いました。ありがとうございます。

4. これまでの平和学習

高島市長	<p>私からも少し、お話しさせてください。最初のあいさつでもご紹介したのですが、今年の8月に長崎で平和首長会議という、日本や海外の市長が集まる会に参加してきました。例えばイギリスやメキシコなど、いろんな国の方とともに、平和な未来をどうつくるか話してきました。</p> <p>そこで印象的だったことが、まさに今日のお話そのものでした。平和というと、戦争や紛争がない状態と捉えられているけれど、実はもっと日常の、例えば先ほど出てきた環境や人権につながっているんだということです。</p> <p>みなさんも、小中学校で平和についての授業を経験したと思います。もちろん、平和・戦争について考えることも大事ですが、それだけじゃなくて、もっと日常の、例えばクラスの中のもめごとをどう解決するかとかも、実は平和につながっているんじゃないでしょうか。平和って特別なときに考えるものじゃなくて、日常につながっているものであり、私たちの社会が成り立つ基盤なのだと私は考えます。</p> <p>そう考えると、平和学習ってどうあれば良いでしょうか。みなさんよりも次の世代、いまの小中学生も普段平和学習をしていると思います。まずは、印象的な平和学習について聞いてみたいと思います。</p>
国際高校 (天野さん)	私は小学6年生のときに修学旅行で広島に訪れて、平和資料館にも訪れたのですが、実際に被爆された方のお話を聞くことができました。今の世代はインターネットや新聞でしか知ることができないですが、実際に経験された方の話を聞くことができて、どういう状況でどういうことが起こっていたのかを深くお話しされていたのが印象的で、お話しされていたことも鮮明に覚えています。
高島市長	広島に行く前にも事前学習みたいなものはありましたか。
国際高校 (天野さん)	道徳の時間で、佐々木貞子さんの折り鶴のお話を少し学習しました。
高島市長	5年ほど前のお話が、今でも印象に残っているというお話でした。やはり直接

	聞くということはとても大切だと思います。今後は直接経験された方と話すことが難しくなってくると思うので、特に重要性を感じますね。他にはいかがでしょうか。
国際中等 (渡邊さん)	先ほどおっしゃっていた日常的なお話になるのですが、中学生の時に道徳で受けた授業が印象的でした。「自分がされたら嫌なことは他人にしない」とか、「自分がされて嬉しいことは他人にしよう」ということは、それこそ、自分が嫌なことは他人にあっても嫌なことだとは限らないし、逆に自分にやってほしいことは他人にあってもそうだとは限らない、という内容でした。実際にみんなで、自分にとって言われて「嬉しいこと」と「嫌なこと」を班に分かれてランキングを作ったんですが、「真面目」と言わされて嬉しい人と、それが嫌だと感じる人がいました。友達のランキングも見て、言葉で「自分と他人は違う」と言われるよりも、実際に感じることができたのが、良い学びになったと思います。
高島市長	それは面白い授業ですね。確かに、「真面目」と言われて、そうでしょうと嬉しい人もいれば、そう見られているのか、と嫌に気持ちになる人もいますよね。いいヒントをいただきました。ありがとうございます。
芦屋高校 (小林さん)	戦争からの平和のお話になるのですが、私自身も中学の修学旅行で広島に、高校の修学旅行で沖縄に行ったので、資料館などいろいろ回らせていただいて、沖縄でひめゆりの塔の資料館で、実際に体験された方の談話が載っている展示がありました。読ませていただくとやはり悲惨で、戦争ってやはりダメなものなんだという感想が心に残っています。平和について考えていくということは、見て、聞いて、知ることをしないと考えられないということを感じました。
高島市長	直接見て感じる体験は全然違うということですね。直接話を聞くことはできなくても、現地に行く、体験をするという価値は非常に大きいものだと感じました。ありがとうございます。

5. 平和な社会を作るために

高島市長	<p>これまで、様々な話を伺ってきました。最後に、みんなの手元にあるスケッチブックに、これからのみんな、一人ひとりが、平和な社会を作るためにやっていきたいことを書いて発表していただきたいと思います。本日のお話を踏まえて書いてみてください。</p> <p>みんなが書いている間にお話ししますね。実は芦屋市立図書館で「平和の願いを未来へ」という冊子を作りました。平和について考える本を紹介する冊子になっています。私と野村教育長のおすすめ本や、図書館の司書さんのおすすめ本が載っています。</p> <p>私は『荒れ野の40年』という本を紹介しました。40年前の当時のドイツの大統領の演説をまとめた本です。高校生のときに読み、実際に何が起こったのかを見に行こうと、夏休みにアウシュビッツに行ってきました。現地の資料館に行って、語り部さんから直接話を聞いたことが印象に残っています。他にもいろんな本を紹介していますので、ここにいる小中高校生の方も是非読んでみてください。実際に見に行ってみようとか、考えるためにお話を聞いてみようという行動につなげていただければと思います。</p>
------	---

	<p>また、戦争を体験された方々の証言を記録に残している「芦屋市平和記録集」は、インターネットの電子図書館で読める電子書籍にもなっています。こちらもぜひご覧ください。</p> <p>それではみんな書き上りましたので、おひとりずつ紹介していただけますか。</p>
芦屋高校 (小松さん)	<p>私が考える、平和のためにこれからできることは、「受け継いでいくこと」です。</p> <p>芦屋高校には、戦争を経験したという歴史があるからこそ、現在の校風につながっていると感じています。芦屋高校だけじゃなくて、今まで日本で起きた戦争の出来事を私たちが語り継いでいくということは、実際に体験したこと、起こったことを聞かなければ、戦争の恐ろしさや怖さはわからないと思うので、そういうものをつないでいくことが平和につながっていくのだと思います。</p>
芦屋高校 (小林さん)	<p>私は「小さなもめごとでも起こさない」ということで書かせていただきました。今回は戦争と平和、国際的な平和といったお話を来てきましたが、やはり日本は平和を享受している国だと思うので、他者とのもめごとを起こさずに、意見が違っていても、対話を通して納得のできる解決法を見つけ出すことが重要だと思っています。もめごとというのは対立になると思うので、それを対話で解決していきたいという思いで書きました。</p>
国際高校 (アモイさん)	<p>私は「文化交流を広げる」ということを大切にしていきたいと思います。普段の日常生活でもよく感じることがですが、一番怖いのは「何も知らないこと」だと思っています。人と関わっていく中で知らないことが出てくると、人は拒絶してしまうことが多いです。特に人種的な違い、宗教的な違いが目の前に現れるとき、人は拒絶してしまいかがちですが、普段から文化交流を広げておくことで、自分が知らないことが出てきたとしても、それを理解できる、寛容な心で受け入れができると思うので、平和に近づく第一歩として文化交流を広げることが大切なだと思いました。</p>
国際高校 (天野さん)	<p>私は「笑顔や挨拶を大切にする」です。挨拶に関しては、朝登校てきて、友達に一言、言うだけでも会話が広がりますし、笑顔と挨拶は世界共通なので、たとえ言葉や文化が違ってわからないことがあっても、心だけは通じ合えると思うので、このように書きました。</p>
芦屋国際 (石原さん)	<p>私も「笑顔でいること」と書きました。笑顔があると争いごとは生まれにくいなど私自身とても感じるので、笑顔でいることを心がけたいと思います。</p>
芦屋国際 (渡邊さん)	<p>私が思ったのは「助け合うこと」で、助け合う行動は、お互いが相手のことを思いやって行うものなので、人のためを思ってできる行動があると感じて書きました。</p>
高島市長	<p>短い時間の対話の中でも、たくさんのヒントがあったと思います。改めて強調したいのは、平和は勝手にやってくるものではなくて、みんなで守り続けないと絶対に壊れてしまうものだということです。それを守っていくのは、誰か、例えば政府の人たち、だけではありません。私たち市民がどう行動していくのかが大切なんじゃないかと思います。戦争の記憶を受け継ぐこともそうですし、日ごろの生活の中でできることもある。笑顔・挨拶・助け合い・文化交流、いろんなキーワードが出てきましたが、その一つひとつが、平和な社会を</p>

築くための第一歩につながるんじゃないかと思います。
本日聞いてくださったみなさまも、この時間をヒントにしていただきて、日々の生活から平和のために自分にできることの第一歩を踏み出していただきたいと思います。参加してくださったみなさん、本日はありがとうございました。



芦屋市市民生活部市民室 人権・男女共生課
〒659-0064 芦屋市精道町8番20号
電話(0797)-38-2055 FAX(0797)-38-2175
ホームページ <https://www.city.ashiya.lg.jp/>

芦屋市HP

